

第 223 回 佐賀地域経済研究会
神崎市観光戦略のプロセス

佐賀地域経済研究会では、令和 2 年 2 月に神崎市千代田支所において、「神崎市観光戦略のプロセス」と題した講演会を開催した。

本講演では、神崎市文化財観光専門員を務められている執行眞知子氏を講師にお迎えし、神崎市の観光振興のプロセスについて、お話しいただいた。

以下は、講演の概要をまとめたものである。

【日時】 令和 2 年 2 月 6 日（木）14:00～16:00

【会場】 神崎市千代田支所（2 階 2-2 会議室）

【主催】 佐賀地域経済研究会

（参加者：21 名）

■講演

◇はじめに

冒頭に執行氏より、神崎市の持つ観光資源について紹介がなされた。神崎市の観光資源は、吉野ヶ里遺跡と九年庵（写真 1）が双璧をなしている。これら以外にも、高床式倉庫をイメージして作られた JR 神崎駅、石工によって作られた脊振眼鏡橋（写真 2）、300 年近く続く大島の水かけ祭り、明治時代に建設された広滝第一発電所、宝珠寺のヒメシダレ桜等が紹介された。執行氏は、これらの観光資源の売り込みに取り組んできた。

写真 1



写真 2



◇宝珠寺のヒメシダレ桜

まず宝珠寺のヒメシダレ桜の売り込みの経緯について説明がなされた。2001 年に、執行氏は福岡のテレビ局に対して宝珠寺のヒメシダレ桜の売り込みを行った。テレビ放送が反響を呼び、宝珠寺はツアーコースの 1 つとして取り入れられるようになった。しかし、観光客の増加に伴いトイレや駐車場の不足が問題となった。そこで、宝珠寺から徒歩約 8 分の距離にある水車の里のトイレと駐車場を活用することによって、この問題に対処した。また、ツアーバスの駐車に関しては、近隣の仁比山公園にバ

スの待機場所を用意し、ツアー参加者の乗降のみを宝珠寺で行うことで対応した。こうして、宝珠寺におけるトイレと駐車場の不足という問題を解決し、ヒメシダレ桜を神埼市の新たな観光資源の一部として定着させることに成功した。例年、宝珠寺には多くの観光客が訪れるようになっている。

◇九年庵の歴史

続いて、九年庵の紹介及び観光動向の説明がなされた。九年庵は、1982年から現在に至るまで佐賀県の森林整備課が維持管理している。元来、九年庵は明治期の実業家である伊丹弥太郎の別荘として建築されたものであった。しかし、大正時代末期に伊丹家は没落し、九年庵は手放されることになった。その後「月星ゴム」の創始者である倉田泰造の所有を経て1982年に佐賀県の所有となった。

九年庵の秋の一般公開は、1988年に始まった。当初は、佐賀県庁の単独事業として、2週間の一般公開を実施していた。しかし、観光客の増加に伴い人員不足が深刻化し、当時の神埼町役場の商工観光課と観光協会が一般公開に協力することになった。その後、一般公開の日程等が見直されることになり、協議を経て、毎年11月15日～23日の9日間のみ一般公開を実施するようになった。この日程は、紅葉の時期に合わせたものであるが、落ち紅葉よりも青々としている方が庭園の見栄えが良いことから、一般公開初日に紅葉がピークを迎えることがないように設定されている。

◇九年庵の団体客の推移とツアー観光

1999年11月に、テレビ朝日系列の報道番組「ニュースステーション」で取り上げられて、全国放送されて以降、九年庵への九州圏内からの観光客は急増した。2001（平成13）年には、執行氏は佐賀県の観光課と共に東京、名古屋、

大阪で九年庵観光の説明会を開催したところ、2003年以降、九州圏外からの観光客も増加した。

大手の旅行会社は、九年庵を秋の観光資源の定番として九年庵を組み込んだツアーを企画している。九年庵を午前中に訪れるツアー企画が多い。九年庵の見学後、旅行会社によって様々なルートが作成されており、1つの旅行会社内でも複数のルートが設定されている。なお、九年庵の一般公開終了後、各旅行会社は速やかに次年度のツアーの準備に着手する。これは、九年庵の一般公開が毎年同日程であり、日が近づくにつれてバス車両の確保や宿泊所の手配が著しく困難になるからである。

観光客の宿泊地に関しては、嬉野市、武雄市及び唐津市が定番となっている。これらの市内の宿泊所は、九年庵の一般公開期間中は、例年、満室となるという。そのため、同期間中は、福岡県筑後市や福岡県朝倉市の原鶴温泉を宿泊先とする観光客も多いという。県内外を問わず、九年庵が近隣の地域にもたらす経済効果は大きい。

◇広域連携を通じた営業の活動

観光素材によっては、日本全国に売り込んだとしても、そのコストに見合うだけの誘客を期待できないものもある。これらについて、執行氏は九州内で年間1～2回の営業を行っている。営業では、神埼市の観光資源を個別に売り込むだけでは迫力不足であるため、佐賀県内で広域連携を行い、観光シーズンが一致する他の市町村の観光資源と組み合わせて売り込んでいる。

具体的な観光資源として、有田町の秋の有田陶磁器祭り、九州陶磁文化館、唐津市の環境芸術の森、武雄市御船山楽園の紅葉まつり、基山市の大興禅寺、多久市の孔子の里紅葉まつり、みやき町山田地区の秋のひまわり園等が挙げられた。

◇教育旅行向けの営業活動

近年、教育旅行向けの観光資源として、王仁博士顕彰公園を売り込んでいる。王仁博士顕彰公園は、社会科見学での利用が多い吉野ヶ里遺跡の近くに位置し、バスの駐車スペースとトイレに加え、大規模収容施設も備えている。そこで、執行氏は教育旅行の道中で安心して弁当を食べることができる場所として同公園を売り込んでいる。

売り込みにあたり、県内の教育委員会、近隣の福岡県筑後市、二日市市の教育委員会に営業を行った。教育旅行専門の旅行会社にも営業を行ったが、教育旅行は1~3年前から計画されているため、営業が即座に実を結ぶのは難しいことを知ったという。

さらに、教育旅行の道中に滞在可能なレジャー施設の定番であった北九州のスペースワールドの閉鎖に伴い、遠方の学校が神崎市から他地域へ教育旅行の行き先を変更するという事態が発生している。今後は、グリーンランドや城島高原といった近隣のレジャー施設がスペースワールドの代わりとなることが期待される。

これ以外でも、最近、唐津市では教育旅行向けに民泊を行なっている。民泊は田舎の子供には人気がないが、都会の子供には好まれる傾向がある。執行氏は、体験型の修学旅行を都会の学校の教育旅行向けに営業するのは良案であると考えている。

◇お金が落ちない公園の活用

さらに、教育旅行向け以外での王仁博士顕彰公園の活用方法の紹介がなされた。冬季のオフシーズンに霧島観光のための冬期1泊2日のツアーがあり、ツアー参加者は川上峡に宿泊した後、翌朝9時に王仁博士顕彰公園を訪れる流れになっていた。しかし、王仁博士顕彰公園で何らかの有料サービスを提供していなかったため、公

園にはお金が落ちない状況であった。執行氏は王仁博士顕彰公園に付加価値を付けることにした。王仁博士顕彰公園が神崎市役所から自動車です約5分の位置にあることから、執行氏や市役所の職員が王仁博士顕彰公園のガイドを始めた。

さらに、王仁博士顕彰公園に賑わいを創出するため、神崎市観光協会による物産の出張販売を手配した。霧島観光ツアー参加者は、初日に宮地岳から神崎市を経由する際に、井上製麺で特産品を購入するのが定番になっている。が、この出張販売でも、1開催あたり1万円を超える売上があるという。また、販売所を訪れた観光客に市内企業の工場見学を促すためのパンフレットを配布している。これによって、工場見学にも観光客が流れるようになったという。

◇神崎めん懷石の立ち上げ

2010年頃、神崎市では、商工会、割烹組合及び商工観光課が共同で「神崎めん懷石」というブランドを立ち上げた。「神崎めん懷石」とは、神崎市の名産品である神崎そうめんを使用した懷石料理である。市内の飲食店は一律2千円でその提供を始めた。結果として、以前よりも神崎市内にお金が落ちるようになった。しかし、店舗の立地によって売上に差が見られるという問題も生じている。

◇海外からの需要と観光動向の変化

最後に、海外からの観光需要及び国内外の観光動向の変化について説明がなされた。近年の訪日外国人旅行者の動向としては、九年庵の秋の一般公開に、訪日外国人旅行者が多く訪れるようになっている。特に2018年は中華圏からの来園者数が顕著であり、記録によると、台湾から566人、中国から348人、香港から205人が訪れている。インドネシアやタイからも来園があり、様々な国からの訪日外国人

旅行者が九年庵を訪れるようになってきている。さらに、台湾からの訪日旅行者がヤクルト佐賀工場の見学に多く訪れている。

ただし、海外からの観光需要は政治問題や感染症等によって大きく変動する。近年の海外需要の変動要因としては、韓国との関係悪化による t'way 航空の運休が挙げられる。

海外だけでなく国内についても、例えば自然災害の後には観光客の数が激変する。観光動向は様々な要因によって左右され、予測が困難である。しかし、観光客の誘致に向けて動き続ける必要があることは確実である。

メディアを通じた誘致に関しては、特に情報番組内の 1~2 分程度の宣伝であっても非常に効果的であるため、積極的に仕掛けているという。新聞では、懇意にしている記者に依頼し、催しが開催される直前に広告を打つといった工夫を行っているという。

■質疑応答

講演終了後には、フロアからの質問を受け付ける時間が設けられた。

地方自治体に勤務する聴講者から、「神崎市の観光に携わりたいという意識が芽生えたのはいつ頃で、何かきっかけがあったのであれば伺いたい」という質問があった。

これに対して執行氏から、「神崎市の観光に携わって丸々 19 年、2020 年で 20 年目になる。神崎市の観光に携わりたいという意識が芽生えたのは、1989 年に遡る。1989 年から 12 年間にわたって吉野ヶ里遺跡のガイド業に携わってきた。そのきっかけは、旧三田川町、東脊振村、神崎町を対象とする商工会の求人だった。自宅が吉野ヶ里遺跡の近くに位置し、発掘前から吉野ヶ里遺跡の地を知る強みがあることから、求人に応募した」という回答がなされた。

この回答に対して別の聴講者からは、「神崎にこのような方がいることが大きな強みのな

で、各自治体でも、このような人材を大事にしないといけない」という感想が述べられた。

さらに別の聴講者からは、「台湾からの訪日旅行者が多く訪れているということだが、台湾に限らず訪日外国人旅行者を対象とした取り組みは、今後どのように行っていく予定であるか」という質問が出された。

これに対して執行氏から、「訪日外国人旅行者を対象としたこれまでの取り組みとして、まず多言語対応のパンフレットを作成した。また、観光連盟と一緒に台湾と韓国の旅行会社への説明会等に参加してきた。特に台湾に関しては、説明会が奏功し、九年庵やヤクルトの工場見学等に多くの方が来訪してくれるようになってきている。今後も、これらの取り組みを維持しつつ、何かしらの形で海外に向けた取り組みを行っていききたい」という回答がなされた。

この回答に対して質問者からは、「台湾は古くからの産業遺産をリノベーションし、憩いの場や観光地として活用することに長けているように感じている。神崎市の観光の強みは、古くからの遺産や歴史的な建造物が現存していることであり、そのような点で台湾と共通する面がある。今後はそのような点にも目を配らせ神崎市の観光を推進していくことも重要ではないか」という意見が出された。

(藤井 翔)